

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 oisp@mac.com (臨時アドレス)

【Home Page】 <http://oisp.jp/>

【Net Forum】 ホームページに掲示板を開設

【代表者】 山本 晴義 (校長)

【発行者】 平等 文博 (運営委員長)

【編集者】 平等 文博

人生について考える(8)

西山 覚 (会員)

「自己」と「他者」の関係、区別は他者の確認においてなされる。それは、感性的存在者である人間が「他者」において否定、拒絶されるときにおいて、他者の意志を感じたときに発生するのであり、その限りにおいて自己が他者と区別されて意識されてくるのである。他者が徹底的に硬い、自己に対して抵抗する存在であるときにのみ自己と他者は区別される。他者との関係において「痛み」や「苦痛」を感じるときに人間は自らの有限な存在性を自覚するのである。人間を含めて「世界」は単なる感覚の集合体ではないのである。人間は感覚というシグナルを受動的に感じるという感覚存在以上の存在なのである。人間は意志を持って世界を獲得するという情熱的存在でもある。

社会的存在である限りにおいて人間は有限存在である。人間の衝動を規定する「先天的要因」は欲求であり、外界に対する欲望であり、欠乏である。

人間は外界との関係においてとる形態、形式は自己の同一性を保持するための外界との代謝活動である。その形式は、欠乏—充足—欠乏—

充足……………という過程である。

まず、前提として欠乏があり、そして充足があるのであり、決してその逆ではないのである。この欠乏—充足という循環構造を理解しておかなければならない。自己と他者の分岐もこの循環行動を通して他者との対立関係を通して形成されてくる。他者への情熱的働きかけというのもこの先天的受動的要因というものを無視しては理解できない。

欠乏、欲求を充足させるためには意識の外にある物質を獲得し消費しなければならないが、そのためには外界を、自然を所有しているということが前提となる。

動物においては物質代謝である外界、自然の消費、獲得は所有という意識が伴うことなく行われている。人間は「剰余価値」が生産され社会が形成されるとともに「所有」という観念が形成され「所有権」という意識が発生してくる。これは法、権利関係の言語化による社会的強制力、相互承認の成立を前提としている。

眼前にある「リンゴ」や「家畜」や「作物」や「土地」が、あるいは「人」が何ゆえに自分の物な

のか。何ゆえに自分の物ではないのか。なぜ「持つ」という観念が成立するのか、その直接性においてはこれは一つの大きな「謎」なのである。

「文化革命」の前提としての「感性の革命」というものがある。「文化革命」の前提条件は「感性の革命」である。「感性の革命」は自然的受動的過程であると同時に意識的過程でもある。人間は人と人との関係を通して自然と関係し、これを所有する。これは人間が自然を、世界を獲得するための方法であり、仕方なのである。これはまた人と人とお互いを「承認」し合う形態の変容を伴っている。「剰余価値」の生産と同時に「主と奴」の関係も成立するのであるが、しかし、それと同時に人間は、人による人の支配という隷属状態に陥り、自らと自らの本質を譲渡するという「疎外」状態に陥るのである。人を支配する人間も、人に支配される人間も、ともに「人間の自由」というものを喪失しているのであって、人を支配する人間は支配される人に依存しているという点において、人に支配される人間は「人間の本質」を支配者に所有され、喪失しているという点において、ともに人間の本質を、自由を喪失しているのである。人間を所有すべき物として、物件として、商品として扱うことにより、人間は自らの人間の本質を喪失しているのである。

「疎外状態」を生み出したのは「剰余価値」の生産である。人間は自ら生み出した物に、自ら生産したものに支配されている。そういう意味において人間は「過去の労働」に支配されている。「過去の労働」「死んだ労働」「蓄積された富」に「生きた労働」、人間が支配されている。

疎外状態の先行形態としては、奴隷制社会や身分制社会、そして、世界史として成立している今日の近代世界システムを挙げることができる。

剰余価値の生産において、第一の否定としての疎外状態、人間の疎外が生み出され、近代世界システムにおいてその疎外状態は最高度に純

化され高まったのである。近代世界システムが克服されることにより人間の疎外状態は克服され、人類の、人間が人間になるための前史は終わりを告げることになるのである。この人間の疎外状態の克服が第二の否定である。この否定の否定の過程を通して、人間は人間に成るのである。疎外が人間の本質の喪失だとすれば、否定の否定とは人間の本質の全面的獲得、奪還なのである。

この人間の本質の奪還過程、高次の段階における回復過程をマルクスは社会主義運動として把握したのである。この過程が個々の知識人において自覚されてくるのである。

この知識人の「自覚の過程」を基本的に規定しているのが時代的条件であり、人々による人間性の全面的奪還、回復の運動の進展状況なのである。

知識人において「疎外克服」が自覚されてきたということは、「疎外克服」が日程に上ってきたということであり、それが社会運動において射程に入ってきたということでもある。この運動は単なる改良主義なのではない。根本的な「変革」なのである。このことを理解しなければならない。

共産主義も資本主義もともに官僚支配であり、官僚主義である。だからともに悪なのであるが、共産主義における官僚主義よりも資本主義における官僚主義のほうがゆるい官僚主義である。だから資本主義のほうが共産主義よりもましな社会である。これがウェーバーの主張である。ウェーバーにとって「善」や「正義」の問題は「よまし」という消極的な改良主義的な問題なのであって、矛盾の抜本的解決を目指すものではなかったのであるがこれはまさしくシステムの支配的意識、イデオロギーそのものなのである。

人間が生きていくためにはいくらかの生活手段、資本主義社会においては貨幣、お金が必要である。しかし、お金だけでは人間の本性に合致した人生を送ることはできない。生きがいの

ある幸福な人生を送るためには「希望」が、「理念」が必要なのである。人生に「可能性」を見出すこと、単なる抽象的な可能性ではなく、「実在的可能性」を見出すこと、それが希望を持って生きるということなのである。

「疎外状態」において希望を見出すことが出来なくなった時、人はニヒリズムに陥るのである。それは疎外状態を「完成された形態」「不動の現実」として理解した時、つまり「絶望」したときに生じるのであるが、それにはそれなりの生活上の根拠があるということを見落としてはならないのである。疎外状態は人々に限りない苦しみと不幸を体験させるのであるが、その最大の苦しみは「物象化(物件化)」された世界における、人格の物件化であり、人間の物件化であり、人間性の否定なのである。個人的なレベルの苦しみのではなくて社会的諸関係からくる「社会的敵対関係」、物件を介しての人による人の相互支配関係という社会的なレベルでの苦しみののである。絶望とは「分業国家」「階級国家」に生きなければならない人間たちの苦しみであり、哀しみであり、慟哭なのである。

この「苦しみの過程」を生き抜くことにより人々は団結し、連帯することを学んでいくのであり、「政治的疎外体」としての「国家」を「社会へ再吸収」することの必要性を痛感するのである。

即自—対自—即自かつ対自という段階、過程において考察した場合、疎外状態以前の状態が人間の端緒的、原始的な未熟な段階としての即自的状态であり、疎外状態、人間の本質が分裂した段階が対自的状态であり、疎外状態を克服した段階を即自かつ対自状態と規定することができる。

言葉による世界の「認識過程」「獲得過程」においても、その「発展過程」「展開過程」は即時—対自—即自かつ対自という過程であり、不断に自己を対象化していく過程である。

未分化の端緒的段階から、自己を対象化し、

その否定性において媒介された自己の在り方へと進展していく。そして、その統一体において自己に帰結した自己として対象とされる。

つまり、精神において対象は不断に自己から反発し、否定するものとして己を開示していくのであり、その過程は「無限反省」「無限反照」という形態をとる。

その過程というのは、過去から現在に至るまでの反省、説明であり、精神の本質とはその性質上「観照性」と「過去批判性」なのである。つまり、精神による世界の獲得とは、最終的には「現状肯定」に帰結するというのであって、精神の展開過程が現実の世界の発展、展開過程ではないということに留意しなければならないのである。

現実の世界というのは「肯定的なもの」と「否定的なもの」との統一体なのであり、矛盾したものなのである。この問題は頭の中だけで解決できる問題、つまり、媒介の問題、論証の問題ではないということに留意しなければならない。頭の中で考えている問題というのは全て過去の出来事なのであって、反省なのである。頭の中で過去から現在までを照射してみても歴史を語ったことにはならないのである。

ドイツ古典哲学の本質は知性主義である。そこには「感性」の展開過程が欠落している。したがって、ドイツ古典哲学への反発から「情念」や「意志」というものが強調されたのは理由のないことではないのである。ヘーゲルの死後、反知性主義、脱哲学という方向へ時代が動いたのも根拠があったのであり、それは近代世界システムの成立、成熟というものを時代的背景としてもっている。しかし、「知性」から「感性」に力点が移ったからといって必ずしも「実践」が強調されたわけではない。

フロイトにしてもウェーバーやニーチェ、フッサールにしてもその「世界観」は形而上学であり観念論なのであって、常に過去を問題にしているものであり、後ろを向いたまま前進している

のである。これは基本的に受動主義を帰結する。人間の本质を「感性的実践」による「実践的確認」の過程として捉えたマルクスだけがはじめて前を向いて前進することが出来たのである。受動的人間における能動主義とはそういうものなのである。人と人との関係を感性的関係としてとらえること、感性的実践において感性が変革されてくるということを理解しなければならない。感性が変革されるがゆえに新たな「志向性」が生まれ変革的实践が可能になるのである。「主と奴」の関係においても不断に「奴」を生み出すシステムにおいて「苦痛」を感じているのがまさに支配を被っている「奴」、圧倒的多数である「奴」であるという点において「奴」には一歩先の未来が見えているのである。したがって、システムの安定において自己の安定を確信している「主」には現在の現実の世界が全てなのであり、システムとしての現実を変更することが根本的に「苦痛」である限りにおいて、その態度、姿勢、構えは最終的に「現状維持」と「現状肯定」に終始するのである。「主」にとって未来とは現システムの延長でしかないのである。

システムを維持するためには支配者の意識、「支配的意識」を社会的意識にしなくてはならない。少数の利益を代表しているのにもかかわらず、あたかも全体の利益を代表しているかのような意識をイデオロギーという。だからイデオロギーとは時代の意識であると同時に虚偽意識なのである。少なくとも一般論としてはそのように言うことができる。

アソシエーションの過程とは「反省と実践の往復運動」の過程である。それはまた失敗と挫折の過程でもある。市民社会においてはそれぞれの立場において様々な利益団体や市民運動、政治活動団体が覇権を競い合っている。市民社会も決して一枚岩ではないのである。理念を掲げ、その実現を目指す過程において、「合意の形成」に失敗した場合にはその運動は失敗し挫折する運命にある。運動が失敗し挫折することに

より実践が反省され、新たな理念が形成される。最終的な成功や完成というものは無い。重要なことは団結し連帯することなのである。団結し連帯するという文化のスタイルこれが重要なのである。

失敗と挫折の連続は一見したところ無意味なことの連続のように思えるが、共通の目的に向かって団結し連帯したということに意義があるのであって、合意の形成という文化のスタイルが新たな文化の形成となっているのである。このスタイルは人類のこれまでの歴史になかった独特のものである。一つの時代が終わりに近づき、受動的ニヒリズムに替わる新たな動きが模索されている。個人の能動性が最大限に要請される時代への客観的条件は整いつつある。アソシエーション過程というのは「物象化された世界」にたいする対抗運動であり、その過程は「感性の革命」でもあるのである。

これまでの反システム運動の致命的欠陥としては「二段階革命論」がある。これまでの左翼運動や民族解放運動においては、まず国家権力を奪取し、それから社会変革を行うという図式が一般的であった。世界のあちこちでこの戦略が採用されたが、その出発点となったのはロシア革命であった。権力を奪取するという第一段階において、戦後、数十年間でこの運動はおおかたの成功を収めたということが出来る。ただし、第一段階においてはの話である。左翼や民族解放運動のほとんどが権力を握ることができた。しかし、社会改革には失敗したのである。左翼や民族解放運動が軍事政権や旧体制とかわりばえのしない運動になってしまい国家と社会の乖離は埋められなかった。大衆蔑視と汚職や腐敗が蔓延する事態になってしまい、「上からの改革」は失敗に終わったのである。人々の能動性については明確に否定されたのである。社会には政治不信と無気力、無関心がはびこるようになり今日に至っている。権力の奪取を至上目的として人々の政策決定過程への関与を認めな

いことや人々の能動性を否定するエリート支配からは何も生まれないということが明確になった。これは国家だけではなく地方分権においても同じことである。政策決定過程からの人々の排除、これが受動的ニヒリズムの蔓延の原因である。既成の政治団体にはこのような状況を克服する意志も能力もないことが、戦後、六十年間の経験で明らかになった。

空虚で内容のない言葉の連呼だけに終始しているというのが現状であり、反省する能力もないのである。財政破綻と民主主義の空洞化により、未曾有の危機に陥っている今日、人々のあらゆる政策決定過程への関与なしに、自発的な運動の展開なしに現状を打開することはできない。このことに人々も少しずつ気づき始めているようである。

アソシエーション運動とはまた、「豊かな人間関係」の構築の過程でもある。「豊かな人間関係」は「感性の革命」の前提条件であり、両者には交互作用がある。「豊かな人間関係」の構築過程は「感性の革命」の過程でもある。相互に作用しながら進展していくのである。この過程はまた「家族」と「社会」の変容を前提ともしている。「家族的なもの」と「社会的なもの」の関係の変容を前提としている。「市民家族」や「市民社会」も歴史的には血縁的關係や地縁的關係を前提として持っている。つまり、近代世界システムにおける「市民家族」や「市民社会」という形態が人間の歴史における人間の普遍的形態ではないのである。

資本主義社会は「力が正義」の世界であり「弱肉強食」の世界でもある。それは「物件を介して」の「物件を所有」することにより他者を支配するという形態をとる。「自由」や「平等」は「抽象法」、「抽象的な法律」に根拠を持つ抽象的で形式的なものであり、無内容なものであり、単なる抽象的な可能性に留まったものなのである。つまり、具体的に何ら保障されたものではないのである。ホームレスやストリートチルドレン、

女性や障害者や被差別者など社会的弱者の生活形態は動物的レベルに限りなく近づいている。システムがそのような人たちを必然的に生み出しているのである。「富の蓄積」と「貧困の蓄積」、「生産のための生産」「資本の蓄積のための蓄積」、それが近代世界システムの論理なのである。それは、たった一回の選挙で全てが決定されるという恐るべき世界なのである。権力の正当化はたった一回の選挙であり、それを理由に人々は政策決定過程から排除されているのである。近代世界システムが円滑に機能しなくなった今日、権力の圧制は福祉の事実上の否定などきわめて凶暴なものになっている。国民を徹底的に弾圧することによってしか自己の存立が図れない状況に追い込まれているのであり、矛盾は露呈してきている。

「プロレタリア独裁論」というのはジャコバン主義の名残であって、今日ではグラムシが指摘するように「機動戦」から「陣地戦」へとというのが基本的な戦略になっている。

国際的には各国間でのネットワークによる連携という形をとりながらも自国の問題は基本的には自分たちが主体となって努力して解決が図られなければならないのである。

国内においても同様であり、各運動や団体のネットワークによる連携は必要ではあるが、それぞれの個別の問題については各運動団体が主体的に取り組まなければならないのである。

近代世界システムが克服されるにしたがい「必然の国」から「自由の国」への移行が始まる。それは「諸個人の自由な発展が万人の自由な発展の前提となるような一つの結合社会」の実現なのであり「個と類の争いの最終的な解決、和解」なのである。これは「完成されたヒューマニズム」であり「完成された自然主義」である。このような理念、このような構想力をもって過渡期を生き抜くことが必要なのである。

メール便り

聞いて頂きたい三つのこと

中村 りょう子 (会員)

寒い「お彼岸」です。

「例会」には出席できないでおりますが、皆様
が日々、「どんな風に考えておいでかしら？」と
は常に思います。

個人として、毎日が健康でさえあれば、世界
や社会の事も「大き目に広め」に考える事はで
きます。

が一旦、ややこしい「病」に侵入されると、
それどころではない。「自らの事」のみに落ち窪
んでしまうのが私ら、小さな存在者です。

このメールは気まぐれではなく、少しく思案
しまして、三つ聞いて頂きたいと書き始めて居り
ます。

その① 氷雨の日曜日、ドキュメンタリー映
画「ボブ・デュラン」(マーティン・スコセッシ
監督、210分)です。

私個人は従来、クラシックやモダンジャズに
親しんだ者ですが、近年、遅ればせに「ロック」
に魅かれて、主として「映像」ドキュメンタリー
で後追っていました。

上記の「ボブ・デュラン」も新聞広告で、突然、
はっと思ひ、館に駆け込み、観たものの、予期
以上の「満たされた」感慨で一杯になりました。

1941年ミネソタ州生まれの「ボブ・デュ
ラン(ロバート・アレン・ジンママン)が思春
期にミュージシャンを志し、あの1960年代、
『ケネディ、キング牧師、ギンズバーグやケル
アック(二人はビート詩人)、ジョーン・バエズ、
etc 出てきます』から1966年までの記録です。
当然ビートルズ(話題のみ)の時代でもありま
した。

シンガーソングライターでフォークを歌って
いた「デュラン」がロックへ変ってゆく過程は

殊に面白い。

世界はキューバ危機、ケネディ暗殺、公民権
運動、北爆(ベトナム)、文化大革命、ブラック
パンサーなど現代史そのもののリアルな回顧も
織り交ぜられた、貴重なフィルムでした。

「デュラン」という稀有なひとりの「ミュージ
シャン」を軸に「当時のアメリカ」の時代は凄
まじく、(赤狩りとかKKK、黒人虐待)対極
には 夢も可能性も沸騰 させるような人々の群
れ、群れ。

熱く、語り、歌い、闘い、考え、苦悩し、連
帯と別離、暗殺、狂気、死、老い。

あの「風に吹かれて」(他に種々の曲も挿入
されて)のメロディーを幾度も聴きながら、私
らはもう少し後の世代なので、色々な事がやや、
ぼけてはいても、あの日本だって、「熱に浮され
て」歌い、踊りまくった若かった日々の記憶も
あり、余韻まで甦る。

只今は、静かに「銭」にヒタヒタすり寄る人々
の不気味な気配が漂う社会です。

その② 吉本隆明「家族のゆくえ」最新著です。

過日、吉本の「西行論」を読み返していて、「や
はり、読み応えは多大」です。

かつて、十分に読み込めなかった「吉本本」
を丁寧に再読しようと決めていた矢先、活字も
大きく(近頃の本はすぐ読了で、不経済!)語
彙が易しいので大変、慰撫されたのです。

「悪人正機」という文庫、糸井重里×吉本の対
談(かなり、べらんめえ調)をおもいだして、ネッ
ト上でも「吉本隆明」捜していて、「ほぼ日刊イ
トイ」で同じく、糸井×吉本の雑談記録「まか
ないめし」に出くわし、ほんと、面白くて、夜
中PCにかじりついて読みました。

多分先刻、ご存知でしょうが。

こんなこと、面白いね！って伝えられる知友は意外と少いのです。

倫幸氏の書評「日高恒太郎『不時着』」とても印象に残りまして何度も読んでいます。

木村さんに「ありがとうございます。」と思っています。

その③ この前の「大阪哲学学校通信」で木村

(2006年4月3日)

身辺雑記二編

義積 弘幸 (会員)

その一・〈自然〉論争

2月26日(日) 昼食の時、私は以前読んだ数学者の言葉をO・T氏に言いました。

「数学において自然はあるか、ないかの証明はできない。それを証明するのは心ではないか？」とある人が言っていたのだけれども「O・Tさんはどう思いますか」と話しかけました。

その時は「ある」とだけ答えられましたが、部屋266(同室)にもどるとO・T氏は激怒されていて、「自然はある！当たり前！」と言われました。

もう一つ「複素数は自然か？」と尋ねると「複素数も数(自然)のうち」と付け加えられました。さらに「人間は？」と問い返すと「人間も自然のうちの一つ。身の回りにあるものは、ほとんどすべて自然である」とO・T氏は言われました。

私は「自然」(ネイチャ [英]・ナトゥア [独])を非常に狭く考えていたことに気がつきました。これは大きな「転回」でした。

また、日本には「自然」という言葉があるが、

それはどうだろうという話になった。『国語辞典』(三省堂)で調べると「しぜんの古語的表現」と書いてあった。「自然論争」はここで終わった。

その二・〈管理〉論争

一人の保護室に入っている人が、AM12時からPM6時半までDルームに出て生活していた。

しかし、PM6時半に再び保護室に入る時「30分だ、早くしなさい」と言われていた。私は1分や2分のことなら「どうでもいいじゃないか」と思った。それをO・Tさんに言うと彼は、「タバコをもらう時間だってきちんと決まっているだろう。それが遅れると患者から不満が出るだろう。だから、それは決まりなのだ」と言われた。

けれども、私は〈患者の心〉をなごますために〈時間〉があるのであって、時間を〈人間の管理〉に使ってはいけなかったと思った。

ただそれだけのこと……。

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

- 『ニュース・アソシエティブ』第235号(2006/6/3)、経済研究会発行
「世界の地勢学と日本の地勢学」、「書評 A・ネグリ『マルティチュード』」(酒井久一)、
「小泉政権の功罪」ほか
- 『季報・唯物論研究』第95号(2006/02)、刊行会発行
特集・日常生活世界と批判の論理 「日常生活世界批判要綱」(田畑 稔)ほか

【書評】

『環境共同体としての日中韓』

木村 倫幸（参与）

環境問題が地球的規模の問題として認識されつつある現在であるが、その中でも特に「日本を含む東アジアの地域が占める位置と果たすべき役割がますます重要となっている。それは、この東アジアの地域にこそ、『地球環境問題』をめぐる一連の問題群の縮図ともいべき状態が凝縮的に示されているからである」。

本書は、このような視点から、東アジア、特に日中韓三ヶ国を中心に共通して関わる環境問題の諸側面を論じる。

まず本書は、東アジアは「世界の経済成長センター」として、1960～90年代に日本→韓国・台湾（アジア NIES）→タイ、マレーシア、インドネシア（ASEAN 諸国）→中国（華南沿岸部）という軌跡を描いて目覚ましい経済成長を遂げてきたが、同時にこの軌跡は、「その裏面からみるならば、かつての1960年代における経済の“急成長”期のなかで日本が直面した激しい“公害と環境破壊”の波に、東アジアの国・地域が次々と飲みこまれていくという過程でもあった」と指摘する。

そしてこの“急成長”は、圧縮型工業化、「爆発的都市化」、資源浪費的な大量廃棄型社会化を特徴とし、その結果としてこの間に「各種の公害・環境問題の複合的な激化」——「産業公害」と「都市公害」、「伝統的問題」と「現代的問題」、「国内的問題」と「国際的問題」の複合的な激化——をもたらした。

このような状況は、東アジアの諸国・地域において、「これまでの各『国民国家』による分断化の歴史を改めて問い直し、『環境コモンズ』に関する相互協力的な共同管理のための新しい原理や機構を模索し創出していくことが求められる時代」を強く意識させる。すなわち「国家利

害主義（Nationalism）の枠を打破し、「地域共通利益」（Regional common interest）として「環境コモンズ」の共同管理を「開かれた地域共同主義」（Inter-regionalism）にもとづいて推進していくことが求められているのである。

本書では、まず「第1章 世界の中で影響力を増大させる日中韓」において、この三ヶ国の経済的影響力とこれに伴う環境負荷の高まりが概観され、相互に「環境破壊の因果関係」で結ばれていることが指摘される。そしてその特徴として、（1）「三ヶ国間、あるいはそれぞれの国内における経済や生活水準の格差の存在が大きな要因となっている」こと、（2）上の（1）と関わって、「中韓、特に中国における環境破壊が、日本の過去の事例をなぞっているように見えるケースが多い」こと、（3）三ヶ国の間で共通する問題——農漁村の疲弊と国土の乱開発の問題等——が非常に多いこと、（4）環境破壊・負荷の規模が大きいこと、があげられる。

「第2章 既に環境共同体に！？ 相互に環境破壊を輸出し合う日中韓」「第3章 日中韓の環境問題には大きな共通点があった」「第4章 各国が直面する深刻な環境問題」では、具体的な諸事例を通して、三ヶ国の環境問題の現状が語られる。

例えば、第2章では三ヶ国間の環境破壊の輸出がこう報告される。

〔中国→日・韓〕酸性雨の原因物質。「黄砂」。海岸へ漂着のゴミ。「毒菜」（高濃度の農薬のついた野菜）。〔日本→中国〕工業廃棄物。日本企業による中国国内での環境汚染。〔日・韓→中国〕中国国内での日・韓向けの大量の農薬使用の農薬による汚染等々。

また第3章では、CO2 排出量の増加、原子力

発電所問題、ダム開発、外来種、都市のゴミ問題、遺伝子組み換え作物、化学物質過敏症患者の増加が、第4章では、最新のトピックスとして、日本での諫早湾干拓、核燃料サイクル等、中国での「公害大陸」の現状、三峡ダム等、韓国でのセマンガム干潟、「温山病」等が取り上げられる。

そして第5章では、これらの諸問題の解決と未来に向かって日中韓で台頭しつつある新しい行動主体（NGO等）や多面的な地域間協力ネットワーク（「東アジア環境協力ネットワーク」）の取り組みが紹介される。ここでは具体的には、「三同時」制度——「生産設備と汚染対策設備の両方をそれぞれ同時に『設計』『建設』『稼動』させる」ことで汚染問題の発生を防ぐ制度——や事業アセスメントと計画アセスメントに加えて戦略（長期構想）アセスメントまでも導入した法体系を目指す中国の試み、住民の力によって放射性廃棄物処分場建設を白紙に戻した韓国・扶山の例、「環境自治体」創造を目指す日本の地方自治体の運動等が報告されている。

以上のように本書は、新書版でありながら重

要かつ緊急な盛り沢山の内容を含む書物である。もちろん本書によって全ての問題が取り上げられているわけではなく、解決の方途もまた緒に就きかけたばかりのものも多い。しかし東アジア、特に日中韓を「環境共同体」とした視点は、今後の環境問題の発信のみならず、「国民国家」の諸問題を検討していく上に大きな手がかりを与えてくれるものであると言えよう。（寺西俊一監修、東アジア環境情報発信所編、2006. 1. 22. 発行、集英社新書、700円＋税）



大阪哲学学校活動日誌（「通信」35号発行以降）

- 2006 1.28.「大阪哲学学校通信」第35号発行
 1.28. 新年・会員参加者交流会
 2.18. <知の歴史> 入門講座第4シリーズ……………講師・笹田利光
 「宗教批判と哲学的意識—『ソフィーの世界』から John LENNON まで」
 第1回「『ソフィーの世界』の内的構造と問題点あるいは〈神〉と人類をめぐって」
 3. 4. 同、第2回「宗教はいかにして守られるか、あるいは唯物論と反唯物論」
 3.18. 同、第3回「ジョン・レノン『ゴッド』の世界とその宗教批判あるいは哲学的射程」
 4.15.「大阪哲学学校物語り—戦後〈民主主義科学者協会〉から〈大阪哲学学校〉まで」
 ……………講師・山本晴義
 4.29. 同、第2回……………講師・山本晴義
 5.13. 同、第3回……………講師・山本晴義
 5.27.「倫理をめぐる二つの話題（1）—現代進化論と倫理」……………講師・平等文博
 6.10.「倫理をめぐる二つの話題（2）—心理主義と倫理」……………講師・平等文博
 6.24. <知の歴史> 入門講座第5シリーズ
 「マックス・ウェーバー入門—『プロテスタンティズムの倫理』から〈人でなし〉
 の支配する近代社会を問う」（第1回）……………講師・青江 透

【『人間論のファンタジー』続き】

オイディプスの闇

やすい ゆたか（会員、講師）

三叉路に気づきし時は投げ出され
己も知らず立ち尽くすかな

上村陽一がさそりに咬まれて倒れて意識を失ってからどれぐらい時間がたったか分からない。ほんの数秒なのか数百年、数千年たったのかも定かではない。意識が回復して立ち上がったとき三叉路に立っていた。はて自分はどの道を来たのか、そしてどの道を選ぼうとしていたのか、さっぱり分からない。その上肝心の自分自身が誰だか分からない。そういえばここに来る前に「汝自身を知れ」という標語が門に掲げである神殿にいたような気がする。それにどこかでペロポネソス半島の真ん中の臍にあたる場所に運命を予言する陽光の神アポロン神殿があると教わったことがある。その話を聞いたときは、その神殿があったのは二千年以上前だったような気がするが、〈そりゃあそうだ実は上村陽一は二十一世紀の初頭の日本の高校生なのだから。〉

アポロンの神の御殿のその門に
掲げし言葉「汝自身を知れ」

「汝自身を知れ」という標語は、伝説では紀元前七世紀に、最初の哲学者といわれたタレスが考えた標語らしい。一般には「分を知れ」という意味で受け止められている。ギリシアではポリスの団結と秩序を守ることが最も大切とされていたので、個人が傲慢から勝手気ままなことをして、ポリスの秩序を乱すことを最も悪いことだとしていたのである。

後にこの標語を見たソクラテスは、自然への問から自己自身への問へ転換する転機をつかんだといわれる。しかしこの標語の作者であるタレスはコスモスを形成している根源物質つまりアルケーを探求していたのである。タレスは自然〈フィシス〉を探求していたのに、「汝自身を知れ」とはおかしいではないか、陽一は倫理の授業で榊周次に質問したことがある。榊は「それは素晴らしい質問だ」と応えた。「〈汝自身を知れ〉の答が〈アルケーは水である〉ということなのだ、それ以上は自分で考えてみなさい、どうしても分からなかったらまた質問にきなさい」というのが榊の返答だ。「はい、分かりました。考えてみます」と元気よくこたえたものの、そんな難しい哲学の問題を高校生が自分で考え付くだろうかと思った。

三叉路に迷いし我を襲いたる
杖持つ人よ果つるも運命か

一体俺はどうすればいいのだ。どの道を行くべきか、三叉路の真ん中で立ち往生したまま、胸が張り裂けそうになり、「ウォー、ウォー、ウォー」と孤独な獣のように咆哮した。そのあと寂寥が訪れ、不安の中で人恋しさに打ち震えていた。そこに突然、怒鳴り声が入った。「無礼者！三叉路を塞ぐとは、けしからぬ奴だ。とっと道を開けろ」そう叫ぶや否や、白髪まじりの初老のいかめしい男が、一人乗りの馬車の上から、馬にあてる鞭を陽一に振り下ろしてきた。孤独の哀しみに囚われていただけに、この鞭に対する怒りは激しく燃え上がり、陽一は自分を制することはできなくなってしまった。気づいたと

きにはその鞭を取り上げ、思い切り、その男を鞭で打ち据えていた。すると四人も伴をしている者がいて、彼らが刀を振りかざして立ち向かってくるのではないか。陽一にどうしてそんな戦闘能力があるのか不思議だったが、彼らから奪った刀で、頭と思しき男を含めて四人を切り殺していた。そして一人だけ命からがら逃げ去ったのである。この事件が運命のいたずらであったとは、陽一には気づくはずもなかった。

東の方角へ路を取った。エーゲ海を見たいと思ったからである。海を見ると何かいいことがあるかもしれない。エーゲ海とデルフォイの中間あたりに湖があって、その近くにテーバイというポリスがあった。テーバイに近づくと町から逃れ出てくる群集に出会った。なんでも町には怪物の呪いがかけられているという。いつその怪物の人身御供にとられるかもしれないというのである。

謎かけて人身御供を求めたる

曲爪乙女愛を知らずや

テーバイの町はずれで呼び止める声がある。「さあおいで、オイディプス。わしはそなたを呼んでおる。そなたの知恵を試そうと思っての。」なんと鳥の羽を身に纏った老婆が呼んでいるではないか、「お前が噂の怪物スフィンクスだな。俺の名前はオイディプスというのか。どうして知っているのだ。」「お前の足が腫れているだろう。腫れ足はギリシア語ではオイダ・プスだからオイディプスという。お前が通りかかることはとっくの昔から分かっていたのさ。私はなにしろ魔女だからね。ウ・ヒ・ヒ・ヒ」「超気持ちワリーーイ。知恵を試す？正解したら何かかれるのか？」陽一が言うと、「テーバイに私がかけている呪いとけるのじゃ。そしたらお前は、テーバイの英雄としてテーバイの人々から大歓迎を受け、なんでも望みのものがもらえるだろ

う。」

「婆さんからは何ももらえないのか？」と突っ込むとスフィンクスは怒り出して「婆さんとはなんだ、わしは歳は食ってはいるが婆さんではない。未だに乙女なのじゃ」と応えた。「それは淋しいことだな、婆さん」「婆さんではない！乙女じゃ。魔法の力を得るために処女を守り通しているのじゃ。ほら見る爪も長いだろこれを曲爪と言って、魔力を強めているのじゃ」と自慢げに語った。

陽一は少し語調を強めて、「せっかく魔法の力を持って、町の人々を呪いにかけて人身御供を取るなんてとんでもない。その力を人々を幸せにするために使えばいいのに」と反撥を示した。すると「わしはポリスの連中が家庭の幸せやポリスの繁栄にふけているのが無性に腹が立つのじゃ。やつらが不幸に喘いでいるのをみると楽しくなってくる。もっと不幸のどん底に落としてやりたいのじゃ」と言い返してくる。「そうか婆さんには言うにいけない怨みがあるのだな。しかし人それぞれに不幸はあるもので、自分だけが不幸だと思ったら大間違いだよ」と説得した。「若造のくせしてわしに説教を垂れるのか。そんなことを言って、わしに謎かけをされるのが怖いのだな」と決め付けた。

もし不正解だったら、人身御供だという。バルカン地方には魔女は人肉を食べるといふ噂があるから、食べられてしまうのだ。『論語』に「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉がある。いまテーバイの人々が苦しめられているのを見て見ぬふりはできない。「よし謎に挑戦してやろう。」

「この地上に、二本足にして四本足にして三本足にして、

声はただ一つなるものあり。地上空中はたま

た水中に、

生きとし生けるもののうち、ただひとり本性を変ず。

さりながら、四本足にて行くときは、四肢の力弱くして、

二本足、三本足のときに比ぶれば、歩みは遅し。
(柳沼重剛訳)」

「欲せずとも 聞け 忌まわしい翼もつ死人の
ムーサよ、

お前の罪業の終わりを告げるわたしの声を。

お前がいうのは人間、地を這うときは
腹から生まれたばかりの四つ足の赤子。

年をとれば三本目の足の杖で身を支え、
重い首もたげ、老いた背を曲げる。(岡道男訳)」

テーバイを救いし故に王冠と

共に得たるはかぐわしき女

甘菓子の匂ひの姫はめくるめく

禁断の床知る由もなし

これが正解だったのか、スフィンクスは断崖から身を投げて死んでしまった。オイディプスはテーバイの町で大歓迎される。ちょうど王が死んで空位だったので、お妃イオカステと婚礼をあげてもらって王位に就いてもらいたいというテーバイの人々からたつての要望だった。陽一はお妃といっても四十歳半ばなので遠慮したいと思ったが、それが黒木瞳みたいに若々しくて美しいので、二つ返事で引き受けてしまったのである。残念ながら例によって記憶を消されているので、彼女が追い求めている三輪智子だということは自覚できなかったのだが。

なにしろ陽一にとっては女性の柔肌にふれるのは初めての体験である。アダムであったときは数え切れないほどエバとのセックスに明け暮れていたのだが、なにしろ記憶は消されている。それにあの時はバーチャル・リアリティ
大阪哲学学校通信 No.36

である。これは紛れもない現実だと思っている。これもまたバーチャル・リアリティだと分かるのはジ・エンドになってからなのだ。ともかく初めてという気持ちが強くて、体がガクガク震えるのである。三輪智子演じるイオカステは優しく微笑み、わずかに恥じらいながら、甘いチョコレートのような匂いを漂わせて身を任せてきた。その刹那、黒木瞳には似てもつかぬオカンの顔がかすかにのぞいた気がしたのは気のせいだったのだろうか。

その日からオイディプスとイオカステの間に二男二女を授かったというから十数年の歳月が流れた。オイディプス王はテーバイの栄えと人々の幸福のために全身全霊をつくして善政を行い、妻子を慈しんで幸せな家庭を築いていたはずである。ところが陽一にはその幸福な時期の記憶が飛んでいる。甘いチョコレートのような匂いをかいで、めくるめく快感に痺れたような気がするが、目覚めると、十数年後の朝なのである。それもその筈これは榊周次の「人間論の穴」の中なのだから。

先王の仇を捕らえて取り除け

テーバイ救ふ道ほかになし

テーバイの民衆がかざしのついた嘆願の小枝をもってオイディプス王の宮殿に押し寄せた。町に疫病がはやり、作物も実りを結ぶ前に枯れ、家畜まで疫病で死滅しつつあった。嘆願は神の助けか、あるいは人の教えに従ってこの危機を救ってくれるようにというものだ。オイディプスは王妃イオカステの弟クレオンにアポロン神殿に伺いを立てにいかせていた。その報せに従って正しく対処するからとなだめたのである。

クレオンの報せによると、イオカステの夫であったライオス王を殺害した犯人を突き止め、その犯人を追放するか、殺害しなければなら

いというのである。アポロンの神託によれば、その犯人はテーバイにまだいるということである。正義の裁きが行われていないと天変地異が起こり、疫病がはやるといふ捉え方である。先王を殺害した男なら、オイディプス王の命も狙うかもしれないので、オイディプスは自分の身を守るためにも、真犯人を突き止めてみせると決意したのだ。

感覚で人を欺き隠れたる

盲みてこそ見ゆまことの姿は

それでオイディプス王が、盲目の占師テイレシアスを召喚した。彼はアポロン神にも劣らないぐらいの占いの力で予言をし、真実を見抜くので、ライオス殺害の犯人がオイディプスだと知っているのだが、オイディプス王を罪に墮すのが忍びなくて頑として証言を拒否しようとするが、オイディプス王はその態度に業を煮やして、真実を言えぬということは、お前がライオス王殺害に絡んでいるからだろうと決め付けた。そこまで言われれば、テイレシアスも己の潔白を明かすためにも真実を告げなければならなくなり、真犯人はオイディプスだと激白してしまう。

盲目の占師なので、真実がみえる筈がないとオイディプス王は決め付けるが、盲目でも心の目で真実を見抜く者もいれば、目が開いていても、真実は何も見えない者もいるのである。ともかくオイディプス王は自分で呼び出しておきながら、物証を伴わない占師の言葉は受け付けない。そしてテイレシアスがライオス王殺しに一枚咬んでいるとしたら、テイレシアスと呼ぶのに功のあったクレオンが黒幕ではなかったかと疑うことになる。

オイディプスは一度疑うと怒りに任せてそれは確信となり、クレオンを召喚して、ライオス

殺しの黒幕と決め付け、クレオンが王座を狙っていると糾弾した。クレオンは王妃の兄弟として、厚遇されて好き放題をしているのにどうしてこの上、重い責任を背負い込むことになる王座に就こうなどと望むのか、私は全くそんな気はないと突っぱねた。

怒りに任せて理性を失っているオイディプスをなだめて、クレオンを帰らせた王妃イオカステは、オイディプスに怒りのわけを尋ねた。オイディプスは事情を説明すると、予言など迷信にすぎないと、自分の体験を告白してオイディプス王を安心させようとしたのだ。

血を分けし子に殺さるる運命を

避けむとライオスわが子殺めり

「ライオス王に神託が伝えられて、ライオスはライオスとイオカステの間に生まれる子によって殺される運命にあるということです。でもライオスは自分の息子にではなく、三叉路でよその国の盗賊どもに殺されたのです。その息子も親殺しの不幸に逢わないようにと、ライオス王が両足のくるぶしを留金で刺貫いて、キタイロンの山中に棄てさせたのです。だから予言など当たるものではありません。」

三叉路と聞いて、激しくオイディプスは動揺した。三叉路でトラブルになり相手を殺してしまったことを思い出したのだ。イオカステに確かめると、その三叉路は場所も同じで時期もオイディプスがテーバイに凱旋する少し前で、見事に符合してしまうのである。そしてその馬車にのった老人の背格好、年齢もぴったりである。一行の人数が五人であったことまでオイディプスの体験と一致するのである。そして一人だけ逃げて帰ってきた男がいたが、その男が強盗の集団に襲われたと報告したのである。ところがオイディプスがライオスに代わって王となって

いるのを見ると、なぜか町から遠く離れた牧場にやってくれと嘆願したのだ。その男がライオス一行を殺したのが強盗の集団ではなく、たった一人の旅人だったと証言を翻せば、オイディプスのライオス殺しは確定する。その男の召喚を命じた。

ここでオイディプスが自分の身の上話をするとところだが、なにしろ「榊周次の人間論の穴」なので、陽一には三叉路以前のオイディプスの記憶がないのだ。これは困った、しかしコリントスからの使者がやってきた、彼になんとか辻褄を合わせてもらうことにしよう。

父殺し、母子相姦の予言避け

離れし人は赤の他人ぞ

「コリントスの王ポリュボス様がお隠れになりました。ご遺言によりオイディプス様をコリントスの王に奉戴いたすことに決定いたしました」と使者はオイディプスを懐かしそうに眺めながら報告した。「ポリュボス様がお隠れになった、それはご愁傷様です。ご病気でなくなられたのですか、それとも何か別の原因ですか。」「ええちょっとした風邪をこじらせて、なにしろもうお歳がお歳ですから」

「ところでどうしてポリュボス王は私に王位を継承されたのだ？」オイディプス王の質問に使者は怪訝な表情で答えた。「オイディプス様はポリュボス王のたった一人のお子様ではありませんか。」「ではどうして私は王位継承者の身でありながら、ポリスを棄てたのだ。」使者は狐につままれたような顔をしている。「オイディプス様は、自分がポリュボス様の実子でないという噂を気にされて、アポロンの神にその真偽を確かめられたら、神託は直接そのことには触れず、オイディプス様が父を殺し、母とまぐわって不義の子をもたれる忌まわしい運命にあることを告げ

たのです。それでコリントスにいれば父を殺し、母とまぐわうことになるかと恐れられ、ポリスを棄てられ、二度と親の顔は見ないと決心されたのです。」

イオカステに耳打ちした。「私はコリントスの王ポリュボスの子供で、父殺し、母子相姦を予言されたが、その父は私に殺されたのではなく、老衰で亡くなられたということだ、予言は当たっていないぞ。」「だから私がお気になさらないでよろしいと申し上げているでしょう。」

「それでは早速、一日も早いコリントスへのご帰還を…」オイディプス王はためらった「まだ母上が生きておられるのだから、母子相姦の予言がある限り、とても帰還はできません。」イオカステ「予言というものがいかにかいい加減か分かったのだから、ご心配は無用なのでは。」使者は苦笑して言った。「ハ、ハ、ハ、その心配はご無用です。だってオイディプス様はポリュボス王とその妃ドリリス出身のメロペ様の実子ではありませんから。」オイディプス王の胸に暗い影がよぎった。「どうして分かったのか」と使者に尋ねた。「ポリュボス夫妻にはお子様がおられないので、大変かわいがられ、ひがまないように実子として育てられ、そのことに関しては事情を知る者には緘口令を敷かれていたです。」

イオカステが口を挟んだ。「それをどうしてあなたはご存知なのですか?」「実は私がキタイロンの山で棄てられていた赤子を救った牧場番が、もてあましていたので、その人から貰い受け、ポリュボス様にさしあげたのです。お可哀想にその子はくるぶしを留め金で刺し貫かれて結ばれていたのです。私が抜いてさしあげました。オイディプスの名前はそこから由来するのです。」

この証言はイオカステの子棄ての話と符号す

る。しかもその牧場番はライオス家に仕えていたというではないか。早速牧場番が召喚された。イオカステはこのときはっきりと自分たちが棄てた子が、自分の夫を殺し、自分の夫となっていたことを知り、そのことをオイディプスに知られまいと、詮議を止めようとした。しかしオイディプスは自分が無慈悲に棄てられた卑しい身分の子であることが分かるのを妻が嫌がっていると思った。まさか貴い身分の子ならそんなひどい仕打ちをうけないはずである。きっと奴隷の子だったと考えたのである。

牧場番は使者から当時の事情を質され、オイディプスから真相を白状するように迫られて、ついにライオス王の子を預かり、殺して山に棄てるように命令されたことを告白した。神託によってその子が父を殺し母子相姦をする忌まわしい運命にあるために、その不幸から逃れさせるには殺すしかないからということだ。だが牧場番はとても赤子を殺すことはできない、ためらっているところを羊飼いの仲間が他国に連れていくというので、それなら父を殺す心配はないと思い、憐れみから渡したという。「なんと運命を逃れさせるためにしたことが、運命を叶えさせることになろうとは。ああ、私はあのとき、三叉路でライオス様が、そうとは知らず、自らが棄てたお子様の手にかかって討たれたとき、わたしも一緒に死んでおけばよかったのだ、そうすればこんな悲劇の結末に立ち会わずに済んだものを」と牧場番は叫んだ。

順逆の床に横たふイオカステ

吾が妻にして母なる女よ

陽一はうろたえた。ウワー、俺はすごい悲劇のヒロインだ、じゃなくてヒーローだ。父を殺し、母とまぐわって不義の子をつくってしまった。その裁きを我と我が身に下さなければならない。ここでヤバイといって逃げ出したら最悪だ。か

とって腹をかっさばくのもグロテスクだ。ともかく館に引っ込もう。なんと館の中ではイオカステが首を括って死んでいた。その骸を抱き寄せ、「おお、痛ましい姿、吾が母にして妻なるイオカステよ。お前は吾が子の母にして妻にして祖母なのか、そして吾は吾が子に対して父にして兄にして祖父である。ああ、なんとわれわれは時の流れに逆らって、命の順序をあべこべにするるとつもない罪を犯してしまったことか。それは死すべき運命の人間が犯してはならない罪なのだ。」

真実を見れぬ眼はくりぬきて

ひたすらに観よ「オイディプスの闇」

オイディプスはイオカステが正視できなくなり、イオカステを順逆のベッドに横たえて、決意したように言った。「おお、真実を何一つ見ることができなかった眼よ、これ以上痛ましい光景を見なくて済むように抉り出しておこう」と叫ぶや、妻の衣服から留金を抜き取り、それで自分の両の眼を何度も突き刺した。

オイディプスは、クレオンに国政をゆだね、罪に穢れた吾が身をテーバイから追放するよう、クレオンに願った。クレオンはたっの願いを聴きいれるしかなかった。「スフィンクスの謎を解いたあなたが、どうしてこんなむごい運命に生きなければならないのか、まことに理不尽だ」と同情した。オイディプスはうなずいてこたえた。「今となって考えてみると、あの解答は果たして正解だったのか、疑問だ。」「二本足にして四本足にして三本足にして、というのに成人、赤子、老人を当てはめて見事人間と答えたのでしょう。実に見事な解答だ。」「実はあの時俺は<人間>と答えたつもりで自分を指差した。するとスフィンクスはうろたえて、崖から飛び降りたのだ。」「すると正解は人間ではなくてオイディプス王だということですか。よく分かりま

せん。」

「人間は二本足にして四本足にして三本足にしてというように、同時に成人、赤子、老人を生きることではない。ところが人間の道を踏み外すことによって、成人でありながら、赤子と兄弟になり、母と相姦して老人と同じ世代になった。つまりオイディプスは同時に時の掟に逆らって三世代を同時に生きる謎的存在になってしまったのだ。」

クレオンはたたみかけた「それではスフィンクスはあらかじめ、あなたがそうなることを知っていたのですか。でも知っているとしたら、崖から飛び降りることもなかったわけだ。」オイディプスは少し考えて言った。「アポロンの神のなさることをすべて知ることはできない。スフィンクスの呪いも運命が貫かれるための道具立てなのだ。」

クレオンは天を仰いだ。「ああ、無慈悲なる運命の神よ、あなたはオイディプス王をもてあそんで、人間はどんなに逆らっても運命には従うしかないことを示されたのか。ならば、かくも悲惨な運命に見舞われた方は何を支えに生きていけばいいというのか、それはあまりに不均衡だ。天秤をもっていつもバランスに心を砕いておられる正義の神デューケーにあまりに失礼ではないのか。」

盲目の占師テイレシアスが現れて、クレオンに話した。「神々に不平を言っても詮無いことだ。たとえ目が開いていても真実は見えないものだ。しかし目が見えなくても真実が見えることもあるのだ。今オイディプス王に見えるのは闇でしかないかもしれない。しかしその闇は、自らの運命に雄雄しく立ち向かって、己自身を見据えておられる尊い闇だ。人間の道を踏み外してはじめて到達した闇なのだ。神々ですら決して侵

すことができない神聖なものなのだ。絶対に侵すことのできない闇に到達されたことで、本当のご自分を見出されたのだ。たしかに不幸にかけてはもっとも惨めな境遇だとしても、その神聖さによって、正義の神のバランスは十分とれているのだ。オイディプス王の御名は何千年後の世まで語り継がれるに違いない。」

「ありがとう、テイレシアス。あなたには愚かにも疑いをかけてしまって、本当に恥ずかしい。そのあなたにこんな優しい言葉で励ましていただけるとは。あなたの言葉を生きる支えにして、心の闇を見つめながら生きていけそうな気がする。」オイディプスは歩きはじめた。そして突然明るい表情をして、「そうだ、分かったぞ、オイディプスという名の本当の意味を。〈オイダ〉は〈私は知る〉という意味だ。そして〈プス〉は〈足〉だから足がわたしの特徴になっているので、オイディプスは〈私は自分を知る〉という意味なのだ。私は〈汝自身を知れ〉というアポロンの神の呼びかけにこたえて、何者にも侵されない主体としての自分自身を、自分自身の闇を知ることができたのだ。そしてアポロンの神は、人間に主体としての自己を確立しようとするところに、人間としての尊厳を見出せと教えているのだ。」

上村 陽一は、あてもなく闇の中を歩き続けた。そして突然奈落に落ちていったのである。

